

## 口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げ＞

口永良部島では、本日（27日）から山体の浅いところを震源とする火山性地震が多発しています。火山性地震は前24時間で50回発生しています。

火山活動が高まった状態となっていることから、本日18時42分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げました。

### 【防災上の警戒事項等】

新岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください（図1）。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

### ○ 活動概況

口永良部島では、6月以降、火山性地震が次第に増加しており、本日（27日）に入ってからさらに増加しています。前24時間（本日18時34分時点）の発生回数は50回となっています。火山性地震は山体の浅いところで発生しており、震源は主に古岳付近で、新岳火口付近でも時折発生しています。火山活動が高まった状態となっていることから、今後、新岳火口から概ね2kmの範囲及び向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

6月以降の活動では、これまでの活動と比較して規模の大きな火山性地震は発生していませんが、本日はやや大きな振幅の火山性地震が時折発生しています。

火山性微動及び新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されていません。

噴煙の状況に変化はなく、本日、新岳火口では白色の噴煙が火口縁上100mまで上がりました。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、1日あたりの火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は少ない状態が続いています（5月：検出限界未満～20トン、6月：10～20トン）。

GNSS連続観測では、2021年2月頃からみられていた基線の縮みは同年5月頃より停滞しています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)）でも閲覧することができます。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。



図1 口永良部島 警戒が必要な範囲

新岳火口から概ね2 kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。（図中赤線内）

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

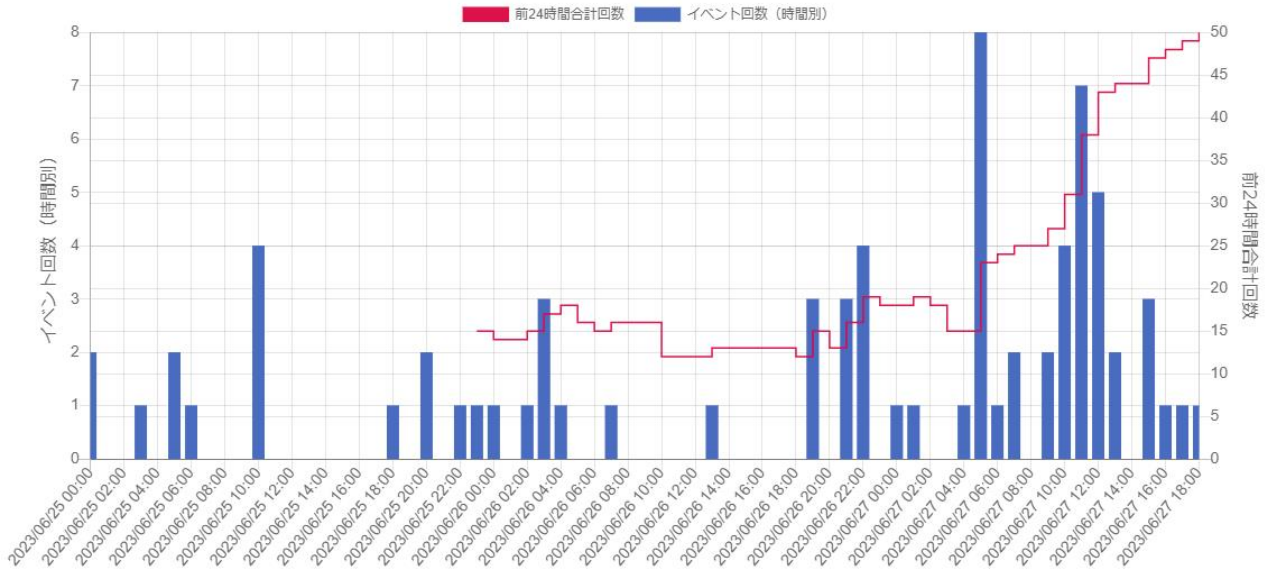


図 2-1 口永良部島 火山性地震の時間別地震回数と前 24 時間の積算回数（2023 年 6 月 25 日～27 日 18 時 34 分時点（速報値））

新岳火口付近及び古岳付近で発生している火山性地震の前 24 時間（本日 18 時 34 分時点）の発生回数は 50 回となっています。

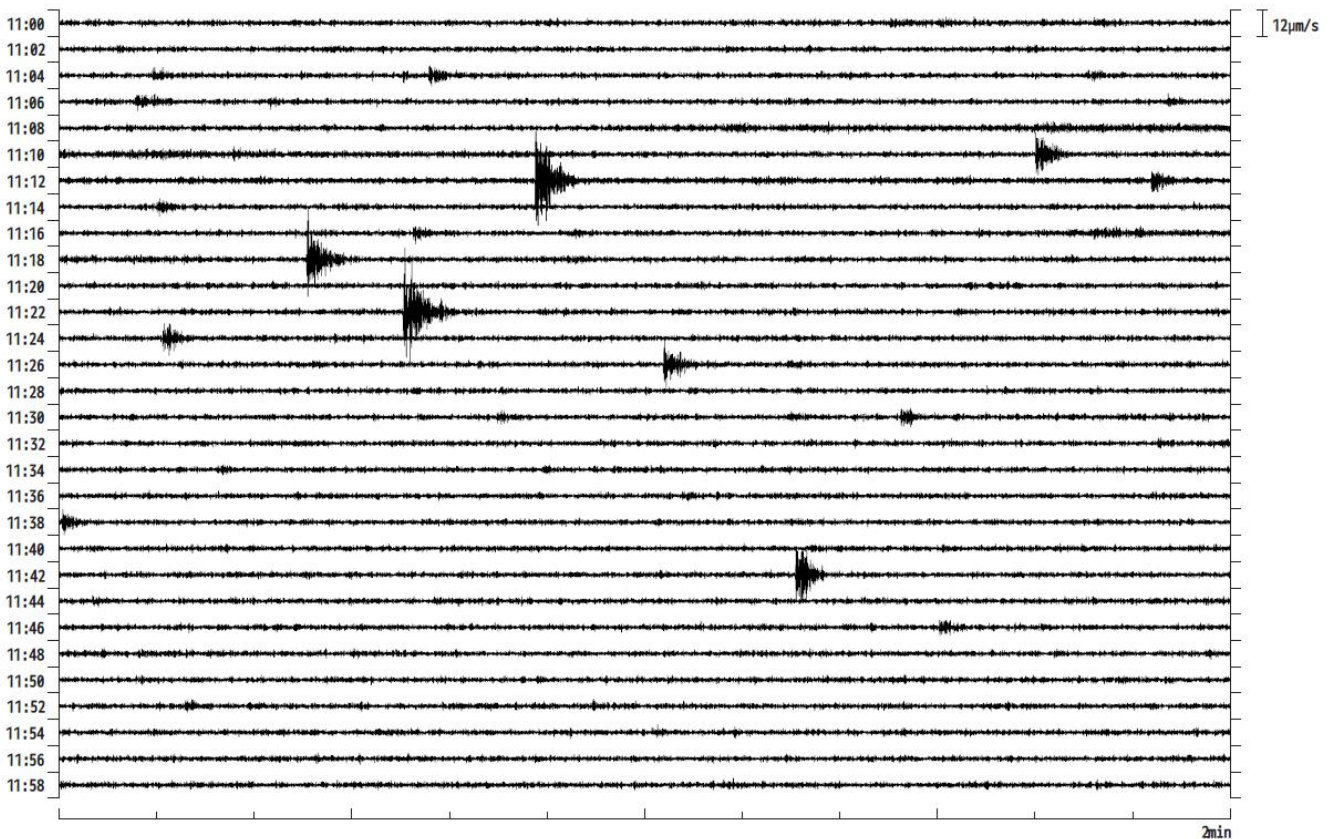


図 2-2 口永良部島 火山性地震の波形例（2023 年 6 月 27 日 11 時 00 分～12 時 00 分、FDKL（京）観測点上下動成分）

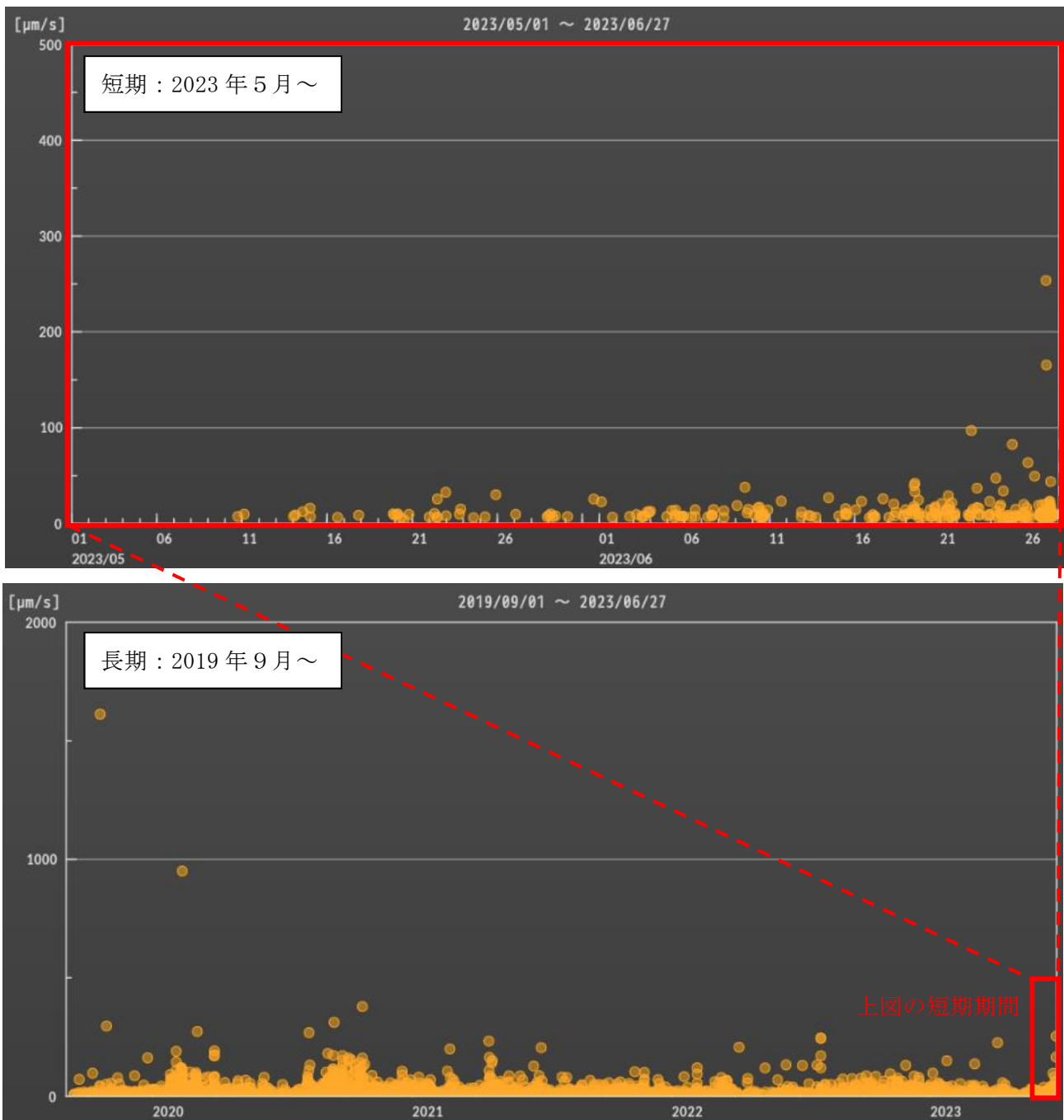


図 2-3 口永良部島 火山性地震の最大振幅（上段：2023年5月1日～6月27日18時34分、下段：2019年9月1日～2023年6月27日18時34分、FDKL（京）観測点上下動成分）

6月以降の活動では、これまでの活動と比較して規模の大きな火山性地震は発生していませんが、本日（27日）はやや大きな振幅の火山性地震が時折発生しています。

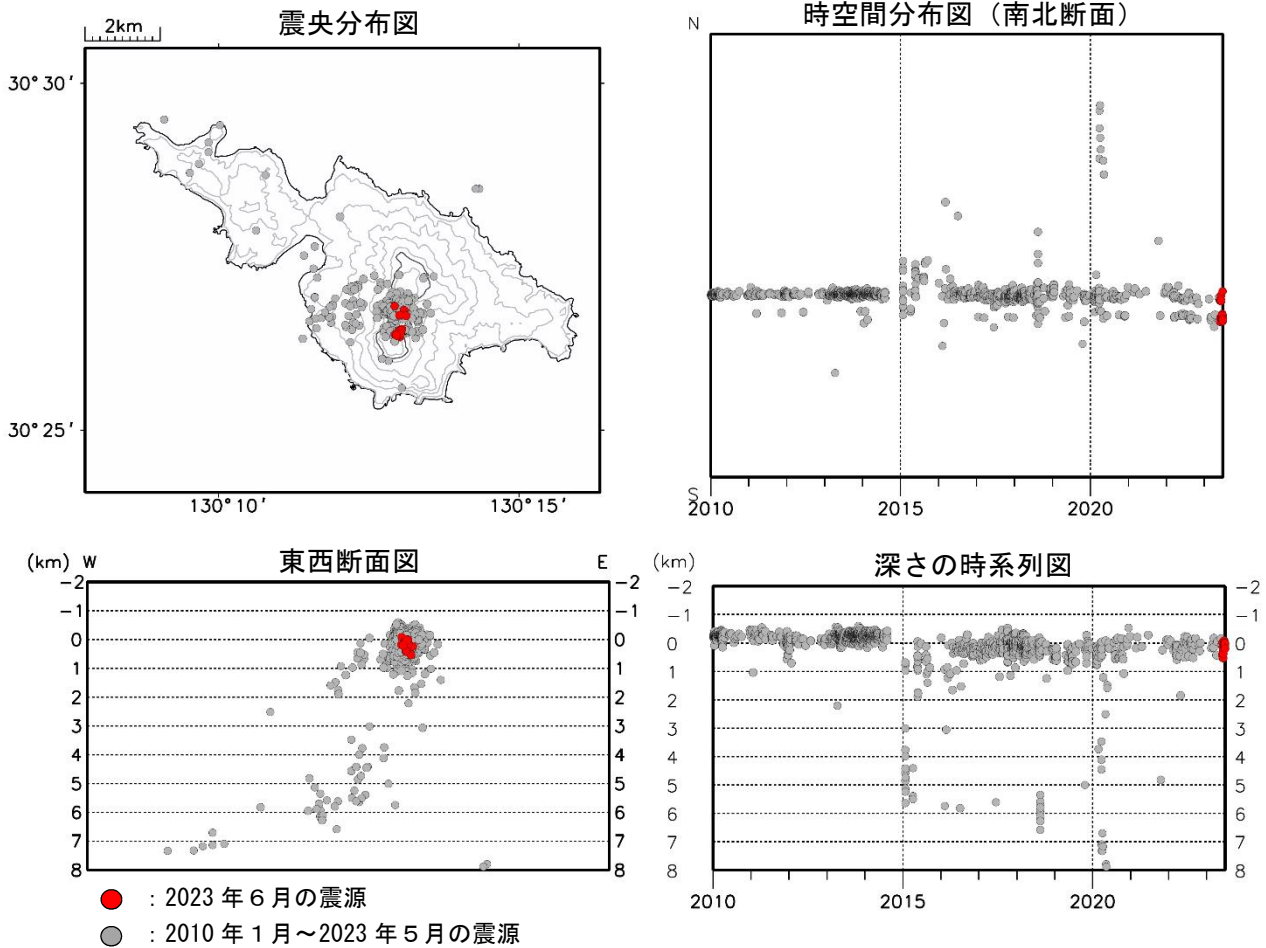


図3 口永良部島 震源分布図（2010年1月～2023年6月27日（速報値））

<6月の状況>

震源が求まった火山性地震は、新岳火口及び古岳付近の深さ0kmから1km付近に分布しました。

観測点の障害等により、検知力や震源の精度が低下する場合があります。

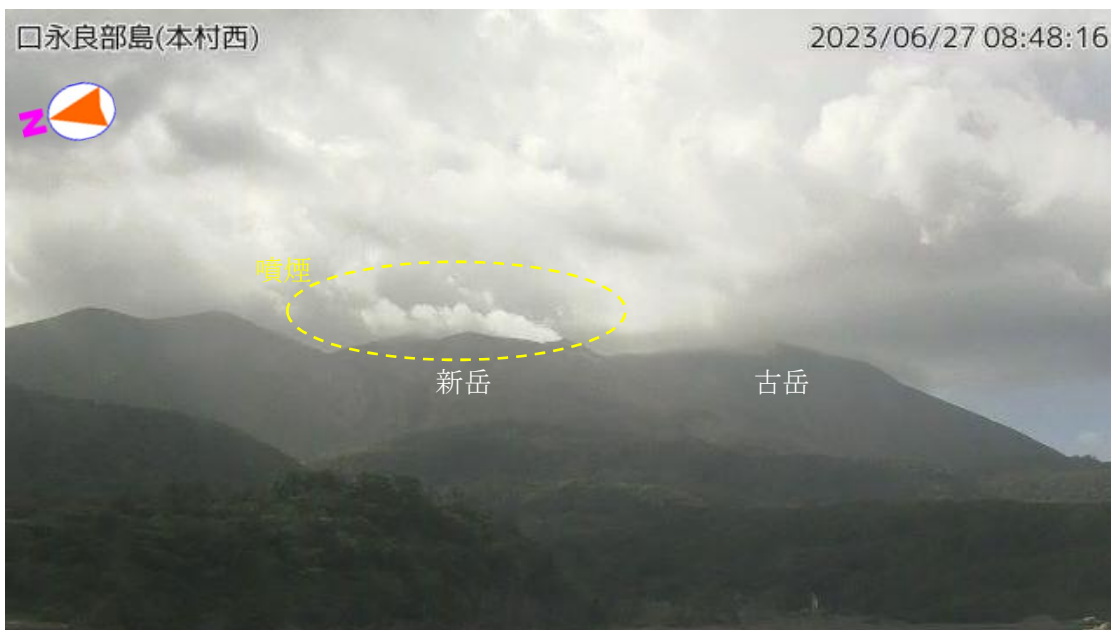


図4 口永良部島 噴煙の状況（6月27日、本村西監視カメラ）

噴煙の状況に変化はなく、本日（27日）、新岳火口では白色の噴煙が火口縁上100mまで上がりました。

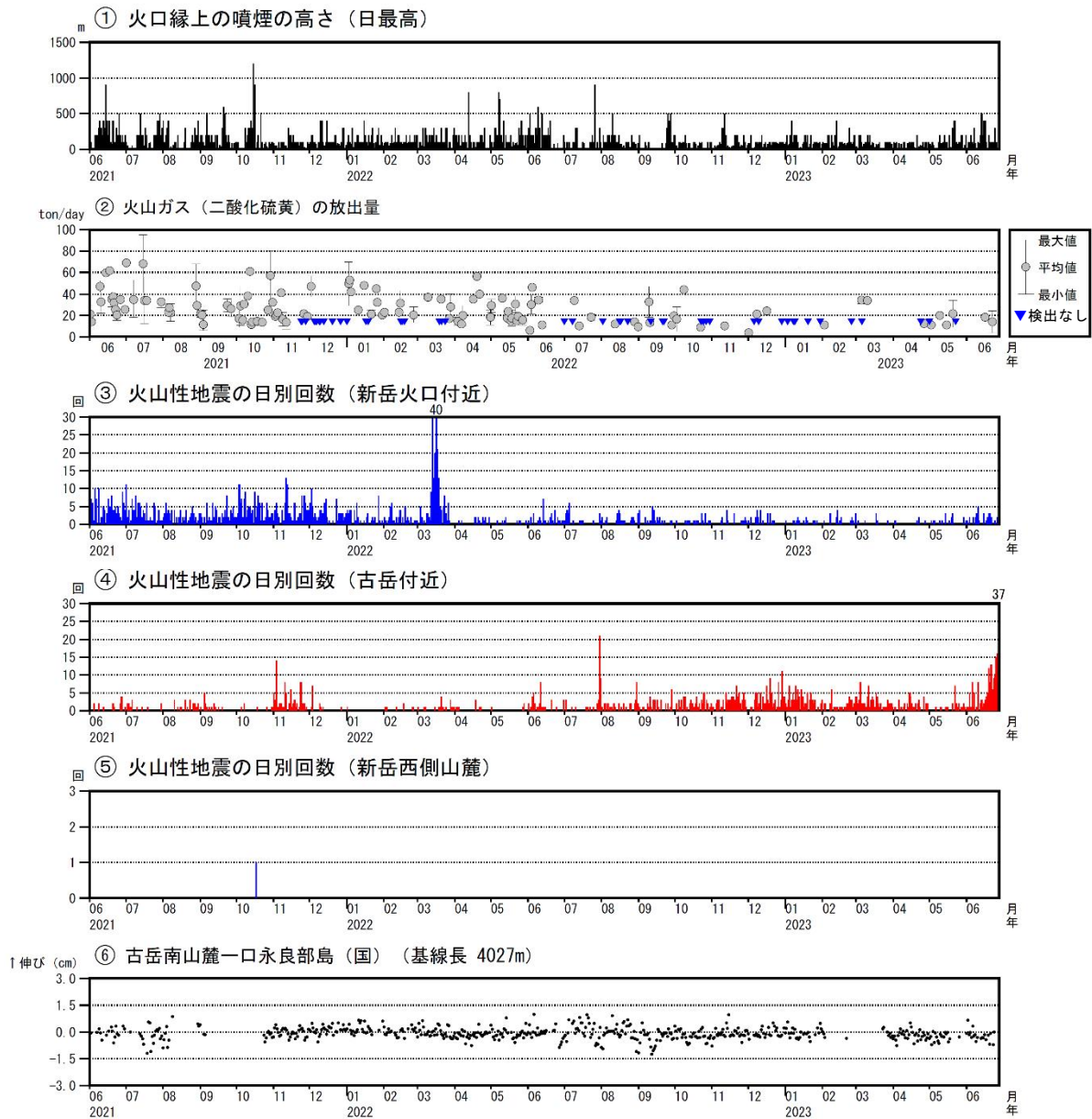


図5 口永良部島 最近の活動経過図（2021年6月1日～2023年6月27日（速報値））  
<6月の概況>

- ・白色の噴煙が最高で新岳の火口縁上 500m（13日）まで上がりました。本日（27日）は新岳火口では白色の噴煙が火口縁上 100mまで上がりました。地震増加前後で噴煙の状況に特段の変化はありません。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、1日あたりの火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は少ない状態が続いています（5月：検出限界未満～20トン、6月：10～20トン）。
- ・火山性地震は山体の浅いところで発生しており、震源は主に古岳付近で、新岳火口付近でも時折発生しています。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されていません。

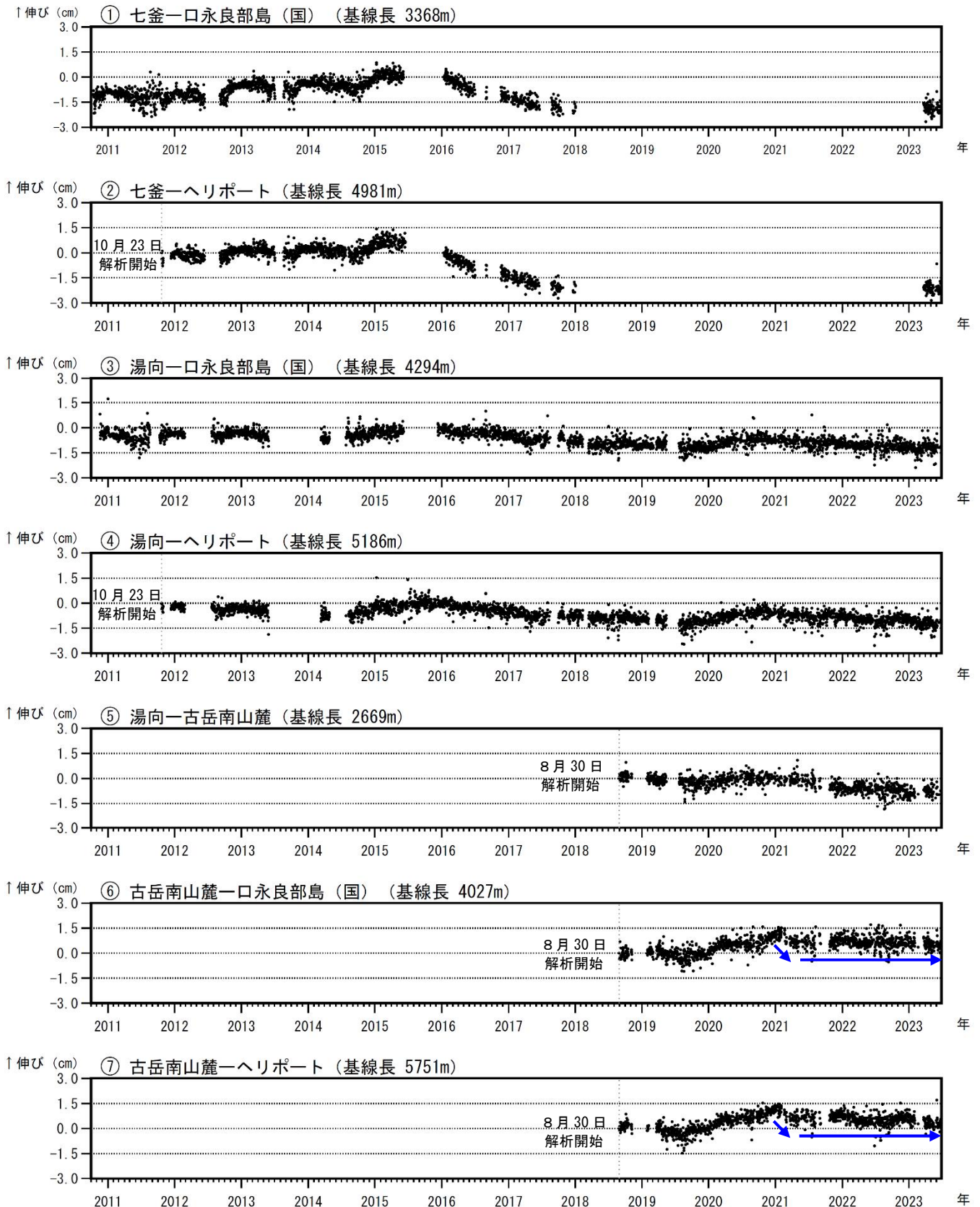


図6 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010年10月～2023年6月27日)

GNSS 連続観測では、2021年2月頃からみられていた基線の縮みは同年5月頃より停滞しています。

これらの基線は図7の①～⑦に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

(国)：国土地理院

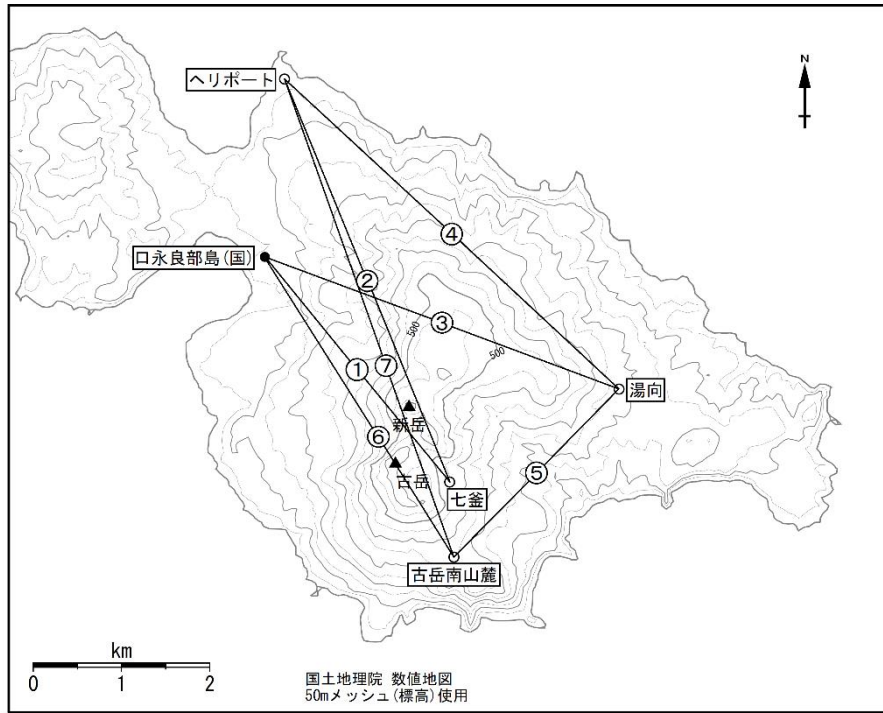


図7 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院

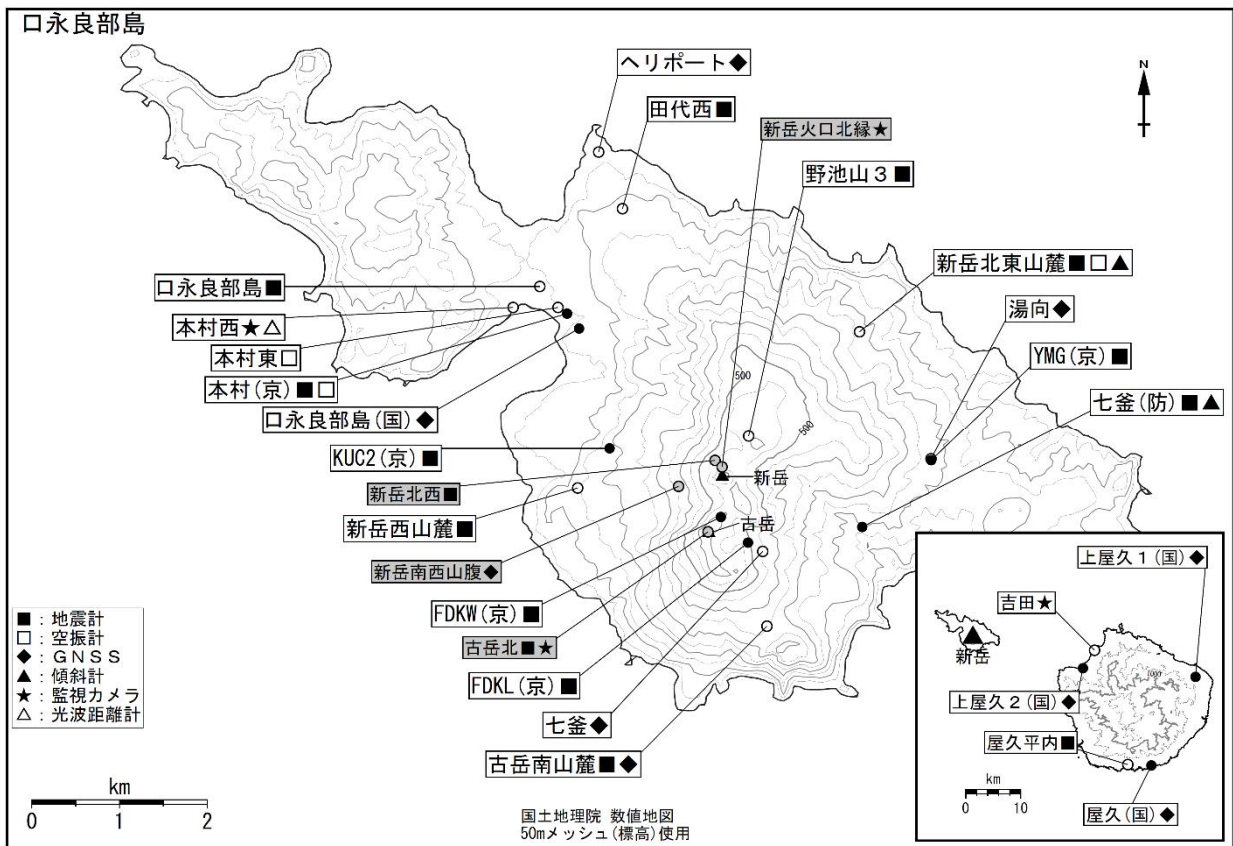


図8 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院、(京) : 京都大学、(防) : 防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。